

平成29年度第2回大村知事と語る会

- 1 日 時 平成29年9月11日（月）午後2時から午後4時まで
- 2 場 所 愛知県庁本庁舎 正庁
- 3 テーマ 環境首都あいちの地球温暖化対策
—地球にやさしい、低炭素社会を実現しよう！—
- 4 意見交換者（五十音順、敬称略）
桂川 優奈 金城学院大学国際情報学部国際情報学科 4年生
川島 良成 ソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ(株)
幸田サイト サイト長
後藤 尚弘 東洋大学情報連携学部 教授
中野 匡博 アイシン精機(株)安全衛生環境部 環境グループ 環境プラン推進チーム
チームリーダー
早川 敦子 タレント・気象予報士
廣瀬 敏重 NPO 法人 竹 ECO 活用 代表
宮木 歩美 中部電力(株)環境・立地部 環境経営グループ 副長
宮澤 宏枝 愛知教育大学大学院教育学研究科 1年生

【知事】 皆さん、こんにちは。愛知県知事の大村秀章です。本日はお忙しい中、「知事と語る会」にご参加をいただきまして、誠にありがとうございます。

この会は、県政の重要課題をテーマといたしまして、第一線で活躍をされている方々から直接ご意見をお伺いし、今後の県の施策に役立てようということと、併せて、県としてこのようなテーマに取り組んでいることを県民の皆様に広くアピールをしたいということで、1年に3回やっております。今年度はこれで2回目ということでございます。今回は地球温暖化対策をテーマとしていきたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

そういった観点から、地球温暖化対策、そして様々な環境対策に取り組んでいただいている皆様の中から、今日は8名にご参加いただきました。本当にありがとうございます。

愛知県は、愛知万博やCOP10、そして、2014年のESDユネスコ世界会議など、環境に関する大きな国際的なイベント、そして会議をやってきておりまして、それを支えていただいた多くの県民の皆様にボランティアの意識、そして環境意識が根付いてきていると思って

おります。

こうした愛知の特性を生かした地球温暖化対策の取組として、エコライフの実践を呼びかける「あいちエコチャレンジ21」という県民運動も推進しており、また、燃料電池自動車などの次世代自動車の普及に務めておりますし、太陽光発電などの再生可能エネルギーの普及にも取り組んでおります。一般の家庭の屋根に太陽光発電のパネルが載っているのは、愛知県が一番全国で多く、日照時間が多いことと、長く県と地元の市で補助しているのが結構効いているのかなと思います。そういったことも進めております。また、様々な環境施策にも取り組んでおります。

私は昨日、朝7時から矢作川の河口のところで釣り大会に参加してきました。この大会は、年1回、秋ごろに私の仲間が、昔から、国会議員のときからやっけていまして、メインの呼びかけ人は、俳優でタレントの哀川翔さんで、わざわざ東京から来て、昔から一緒に釣りをやっています。この大会は、始める前に、まず30分掃除をしてから釣りをしよう、ということで、昨日も掃除をやってきました。ただ、ありがたいことに、矢作川河口の衣浦14号地という県の埋立地ですけど、見た限りでは、ごみあまり落ちていない。皆さん、結構拾ってくれます。だから、せつかくごみを拾う用意をしてきたので、側溝のふたを開けたら、側溝の下に、何かごみが溜まっていたので、それを、こう、みんなでかき出してね。そうしたら、釣りのテグスだとか重りだとか、あと、弁当箱のカラとか、それが、こう、何層にもなっていてですね。ただ、もう、そこは大分、有機物も堆積していて、ミミズからフナムシから、そういう虫の類いが出てきて。まあ、そんな取組もみんな、本当に草の根でやっているな、という感じがしております。楽しみながら環境を良くしていくということを少しずつやっていくというのは、いいことだなと思いました。

そんなことを冒頭申し上げましたが、今日は地球温暖化防止のために活躍する方々にお集まりをいただきました。皆様方の日々の活動状況、普段感じておられることなどをお聞かせいただいて、その中から愛知における地球温暖化対策の一層の推進に必要なアイデアをいただきたいと思っております。

以上、簡単であります。今日の趣旨を含めて、冒頭、ご挨拶をいたしました。今日は、どうかリラックスしていただいて、皆さんがやっている普段の活動をぜひ、お聞かせいただければと思っております。

なお、今日は、ユーストリームでライブ中継をしておりますので、見ている皆さんにもぜひ、自身の活動のPRも含めてメッセージを発していただければと思っておりますので、よろしく

お願いいたします。

それでは、早速始めさせていただきます。まず順番に、それぞれ5分間程度、日頃の活動を通じて地球温暖化対策の推進に必要と感じておられることなどをお話していただきたいと思います。その後、いただいたご意見をもとに、皆さん全員でフリートーキングをしていただければと思っております。

それでは、先ほどご紹介をした順番にお願いをしたいと思います。それでは、まずは早川さんからお願いをいたします。

【早川】 よろしくお願いいたします。早川敦子と申します。私は、大学を卒業後テレビ局に就職をしまして、アナウンサー、それからタレント業をずっとしておりました。

環境に関わる活動を始めたのは、14年ほど前に気象予報士の資格を取ったことがきっかけになりました。気象予報士の資格を取ってから、もちろんテレビ・ラジオなどで気象の解説なども行ってきましたけれども、NPO法人気象キャスターネットワークという団体に入りまして、このNPO法人気象キャスターネットワークというのは、全国で活動する気象キャスターですとか気象予報士がメンバーになっている団体でございまして、気象に関する出前講座や防災に関する出前講座の他、地球温暖化に関する出前講座をずっと行ってきております。

10年ぐらい前、ある企業の支援もありまして、全国で非常にたくさんの小学校で地球温暖化の出前授業が行われていました。私も大体10年ぐらい前から、小学校4年生から6年生向けに地球温暖化の出前授業をしているんですけども、活動を始めたときは、温暖化が進むと、例えば、局地的な大雨が増えるよとか、あるいは、勢力の強い台風が上陸するようになるかもしれないよなんていうお話をしていたのですが、もう、本当にここ2～3年、気候の変化を肌で感じるようになりました。今年の夏も、雨の降り方が違うとか、雷の被害が出たりとか、そういったことで、何だか昔と比べてお天気がちょっと違ってきているなって感じた皆さん、多いんじゃないでしょうか。

そんなお話を小学校に出向いて子どもたちにもするんですけども、あるとき、ちょっと気づいたことがありまして、その気づいたことから、今日は、2つのこととお話ししたいと思います。

まず1つは、私、子どもたちに向かって、昔と比べて雨の降り方が違うよ、暑さが違うよってお話をするんですけども、小学校4年生から6年生ぐらいの子どもたちって、よくよく考えると10歳ぐらいなんですね。そうすると、10歳だとして、彼らが生まれたのが2007年、

つまり、この地方で言いますと、多治見で日本の最高気温の記録が塗りかえられた年、今、テレビでもよく聞かれる「猛暑日」という気象用語が登場した年なんですね。つまり、今の子どもたちというのは暑くなってから生まれている子どもたちなので、昔と比べて暑さが違う、雨の降り方が違うと言っても、ピンと来ないんです。また、地球温暖化の原因であるという二酸化炭素に関して、なぜ二酸化炭素が増えて地球温暖化が進んでいるのかということ、我々の暮らしが昔に比べて便利になったからだよと言っても、昔に比べてと言っても、今の子どもたちが生まれた頃から、もう電化製品に囲まれている世代なんですね。

ちょっと画面の方を見ていただきまして、J C C C A（全国地球温暖化防止活動推進センター）さんが出している図表（「家庭の家電製品・自家用車 世帯あたりの保有数量」）が非常にわかりやすいんですが、恥ずかしながら私が生まれたのが1967年でございます、この辺なんですね。今の子どもたちが生まれた時代というのは、携帯電話なんて普通にある時代ですから、なかなか今の子どもたちには、昔に比べて便利になったから二酸化炭素が増えたということも、実感としてわかりづらいんじゃないかなと思うんですね。これからどんどん便利なのが当たり前になってくるので、こういうこともきちっと伝えていかないと、いくら電化製品の（エネルギー）効率がよくなって、電気をあまり使わなくなったとしても、やはりたくさん使ってしまえばそれだけ二酸化炭素も出してしまうので、このほんの40～50年で私たちの暮らしがどんなふうに変わってきたのか、そして、地球温暖化への影響だけではないかもしれませんが、気候にどんな影響を与えているかということ、きちんと大人が子どもたちに伝えていく機会をやはり継続的に持ち続ける、いわゆる教育の機会を持ち続けるというのが、改めて大事じゃないかなと思っております。これが1つ目です。

そして、もう1つが、今後、地球温暖化対策というのは、緩和策と適応策、両方でやっていかなければならない。低炭素社会をつくるというのは緩和策で、もちろんこれもやっていかなければならないんですが、実際、気象災害も頻発しておりますので、防災教育なども適応策としてですね、しっかりと行っていかなければならないということを考えています。

以上、私からは、継続的な教育の必要性をお話しさせていただきたいと思っております。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。それでは、また後ほどご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、続きまして、廣瀬さん、よろしくお願いたします。

【廣瀬】 今ご紹介にあずかりました廣瀬です。よろしくお願いたします。

私は、竹の有効活用に取り組んでおりますが、そのきっかけは、私は建築士ですので、建築の内装に竹が使えるかということが最初です。いろいろ調べてみますと、建築の建材は皆、中国産の竹なんですよね。それはどうしてかということ、日本の竹林は放置竹林がほとんどで、竹を有効活用するにも竹が惨めで、利用できないんです。

そこで、2010年のCOP10の生物多様性の会議に、生物多様性の一助として放置竹林の整備を愛知県に提案し、県の支援で県営牧野ヶ池緑地の竹林整備と伐採を行っています。その目的は、地球温暖化対策の推進に向けた放置竹林整備、もう1つは、生物多様性の保全につながる整備、伐採。この写真は、僕らが整備する前の竹林です。この10年間に伐採した竹は約2万本で、ボランティアの方が約2,000人近く、それから我々一般の作業員もやはり2,000人近くが竹林整備の作業を行ってきました。

大村知事にも参加願って、竹林整備を行っています。毎年県立高等学校の生徒も大勢参加していただいています。それで、整備した竹林はこのように、今はなっております。

それで、整備伐採が何に寄与するかということ、CO₂削減に非常に寄与するということで取り組んでいます。京都議定書では、CO₂の削減目標6%のうち、3.8%を森林による吸収源として認めてもらっているんですけど、竹による吸収効果は今のところ対象外なんです。それは、放置竹林が理由になっております。

そこで、富山県の中央植物園長・内村先生によれば、整備した竹林は大量のCO₂を吸収でき、CO₂削減に寄与します。森林と竹林の面積から考慮すると、熱帯雨林、温帯広葉樹に匹敵する吸収量となります。森林は30~50年かかって一人前になるんですけど、竹は5年で成竹して、10年で枯れますが、順次生えてきます。そして、きれいに育った竹のこのように青い緑の葉、新しい緑の葉がCO₂を吸収します。そうしますと、今の比率でいくと、CO₂はプラス3.5%ぐらい、日本のCO₂に寄与するということです。

それから、生物多様性の保全にもつながります。先程の写真のように、枯れた竹が縦横に横たわって足の踏み場のない状態では、植物も昆虫も鳥も寄ってこない。それで、竹を整備しますと、(周囲の)大きな木が生き返るわけです。木の根元を見てもらうとわかりますけど、この周りだけでも竹を30~40本切ったんです。そうすると、この木が生き返って、またこれもCO₂を吸収すると。それから、昆虫のカブトムシの幼虫もこんなふうに出てきています。それから、キキョウの花も咲いています。

それからもう1つは、竹を炭や粉にして、田んぼ・畑にまく。それから、生ごみを堆肥にしたり、屋上の断熱材として使用する。それから、バイオマスの活用。発電や肥料。それか

ら、建築内装として使います。それから梨園などの果樹園にもまいています。作った野菜を販売したりもしています。竹の粉は発酵するんです。発酵させると、非常に有能な菌を土中に生むと。そういうこともやっています。

この写真ですが、昭和高校の屋上に竹を断熱材として敷いて温度を測ると、他の部屋の温度が33度のとき、竹を敷くことによって1.5度下がっております。

それから、これはバイオマス発電とバイオマス肥料。今、県と名古屋市とにお願いして、やっていきたいと思っています。

これは、生ごみと魚のあらなどを堆肥にして試運転したものです。

それから、建築内装として、竹をイベント用に使ったところ。

9月の初めに、竹林がきれいになったという話を聞いて、バイオリン奏者の女性がCDのジャケットにしたいということで、撮影に来たところです。

以上です。よろしくお願いします。

【知事】 ありがとうございます。それでは、また後ほどご意見をいただきたいと思いません。

それでは、続きまして、中野さん、よろしくお願ひいたします。

【中野】 アイシン精機の中野と申します。

私どもアイシン精機は、自動車部品製造を主とした会社でありますけれども、CO₂の排出量を極力減らしていくという取組を環境対応の中核に置きまして、活動しております。

その概要をスライドで少しご説明させていただきます。私どもは、2050年に向けてライフサイクルの視点でCO₂をゼロにしていくということで、具体的には、製品の材料製造時、それから製品製造時、走行時、リサイクル時の各プロセスにおきまして、CO₂の排出量をゼロにしていくということで、高い目標ではありますが、様々な努力をしております。

特に、製品製造時の排出量削減活動におきましては、工場での日常的な改善活動、それから、生産技術の開発などにも積極的に力を入れております。しかし、電気やガスといったエネルギーの使用量そのものをゼロにするという目処は、今のところ、正直立っておりません。そしてそれは極めて困難な状況だと捉えております。従いまして、使用するエネルギーを極力減らした上で、やむを得ず使ってしまうエネルギーについては再生可能エネルギーで補っていくという方向で検討を進めております。

具体的には何をやっているかといいますと、例えば、廃食用油、廃てんぷら油で発電したらどうかとか、空いているスペースに太陽光パネルを敷き詰めたらどうかとか、風が強い場

所に風力発電を設置したらどうかとか、排水の落差があるところに水車をつけたらどうかというような検討を進めているんですが、一企業の取組としてはやはり限界がある。では、グリーン電力を購入したらどうか。こちらにつきましても、現状はまだ価格が高いこともありまして、ちょっと購入しにくい。

そういった中で、再生可能エネルギーが豊富にあって、それが安く購入できるようになると、我々としましては非常にありがたい。愛知県は再生可能エネルギーをつくるポテンシャルが非常に大きいと聞きます。先ほども知事のお話ありがとうございましたけれども、日照量が多いとかですね。その一方で、愛知県は工場が多くて、そもそも電力需要が大きいという中で、再生可能エネルギーを近場で消費できる。すなわち、送電ロスが少ない。こういったメリットもありますので、低コスト化が可能であると思います。

それからまた、工場の廃熱もたくさん出ておるわけですがけれども、その廃熱を利用して、地域ですとか事業所に熱供給するという未利用エネルギーの活用、これにつきましても、他の地域と比較しまして、効率のよい運用が見込めると思われます。一般的には、この未利用エネルギーの活用は課題が多いと言われております。具体的には、熱源が不安定だとか、あるいは需要と供給に時間的なズレがあるとか、そういったことも愛知県ですと工場廃熱が非常に多く、また電力需要も多いという特性もありますので、適しているのではないかなと思われま

す。これらのエネルギーの活用は、国際的に見ましても日本は遅れていると聞きますけれども、そこを愛知県さんにリードしていただいたり、我々のような企業を強力にバックアップしていただければと、それは日本をリードしていくということにつながっていくのではないかなと思います。

最後になりますけれども、そのような取組を行っていく上で、県民の方々の理解をいただくというのが不可欠だと思います。そのためには、エネルギー問題のみならず、様々な環境問題について、学ぶ機会、知る機会がたくさんあるといいと思います。環境問題にしっかり取り組んでいかなければ、地域や地球はどうなってしまうのか。また、どんな取組をすれば環境はよくなっていくのか。皆が正しい知識を持って取り組んでいくことが重要だと思います。

以上になります。

【知事】 ありがとうございます。それでは、また後ほどご意見をよろしく願います。

それでは、続きまして、宮澤宏枝さん、よろしく願いいたします。

【宮澤】 それでは、発表させていただきます。

私は、愛知教育大学大学院1年の宮澤宏枝です。大学では国語教育を専攻していて、普段はメディアリテラシー教育について研究しています。

環境問題については、小学校の総合学習の授業で興味を持ったのをきっかけとして、一市民として地球温暖化に限らず環境問題に関する様々なボランティア活動を行っています。

初めに、普段行っている活動の紹介をさせていただきます。その後、私が考えている地球温暖化対策における大切にしたい視点について、普段の活動を通して考えたこと2点と、普段の学生生活を通して考えたこと1点をお話しさせていただきます。それでは、活動紹介をさせていただきます。

こちらは、地球温暖化防止活動推進員の活動の一環で、出前授業を行っているところです。小学校に出向いて行っています。高学年には実験なども交えながら授業をしています。

こちらは、安城市の環境アドバイザーとしての活動です。漫画家の鳥山明さんが書いた環境学習テキストを用いて、環境学習を行います。テキストを読んでもらうだけでなく、紙芝居やクイズなどを導入して、子どもたちに興味を持ってもらえるように工夫しています。どんぐりや落ち葉など、自然に落ちているものを拾ってきて工作をすることもあります。エコクッキングのような活動をするときは、ごみが出ない工夫などだけでなく、地産地消など食育的な内容も重視しています。

今まで紹介した活動は子どもを対象にしたものが多かったんですが、それだけでなく、地域のイベントに出向いて正しいごみの分別を楽しく体験してもらうためのゲームなども行っています。その他、街のごみ拾いなど、美化活動を行うこともあります。

今までご紹介した活動を通して私が初めに考えたことは、身近な話題や体験活動を通して地球温暖化について考える機会が重要だということです。普段活動をしていると、声をかけた方から、「エコの話ですよ、もう知っていますよ。」と答えられる方も多いです。愛知万博があった影響もあって、愛知の方は意識が高いのかな、と勝手に思っているんですけども、そういう方にも、もう一度考えてもらう機会をつくるためにも、身近な話題から入ることや体験活動を取り入れることが有効だと感じています。

2つ目に思うことは、子どもをターゲットにすることのメリットです。子どもに環境の話をする、家に帰って親に話してくれる子が多いので、子どもをポータル、窓口として広くアプローチができます。また、その子が今後も何かの折に環境について考えてくれるようになれば、長いアプローチもできると思っています。教育現場との連携が強く、小学校で出前

授業ができるということは愛知の強みだなと感じています。

最後に、1人の市民として考えたことは、各個人のライフスタイルに合わせた地球温暖化対策についての情報がもっと欲しいなということです。地球温暖化防止に関することは何かと聞かれば、エネルギーの無駄遣いをしないと、公共交通機関を車より選ぶとか、そういうことをみんな答えるんですけど、実際に大学生の生活の中で様々な選択をしている場面というのは、金銭的なものとか効率を重視して決めることが多いなということが、実感としてあります。そういう（選択する）場合に、環境問題に関する基準があまり持ち込まれていないという実感があります。ですので、大学生のライフスタイルだからできることや、今の、現状のライフスタイルと地球に優しい活動のバランスをどう取るのかという視点で考えるための情報をもっとあるといいのかなと考えています。

これで、私の発表を終わります。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。また後ほどご意見をお伺いしたいと思います。

それでは、川島さん、お願いいたします。

【川島】 本日はお招きいただきましてありがとうございます。ソニーグローバルマニュファクチャリング&オペレーションズ株式会社、川島でございます。よろしくお願いいたします。

今日は、ソニーが取り組んでいる環境活動という視点と、それから、幸田サイト、幸田工場の中でやっている環境活動、そんな話を少し資料を交えてご説明したいと思います。

会社の概要なんですけれども、実は大きな工場としては幸田工場を含めて、稲沢、湖西、木更津というところで、大きく4つ、日本に工場を持っています。従業員は大体4,500名ぐらいの会社でございます。

幸田サイトなんですけれども、愛知県の額田郡幸田町でございます。多分、元気のある街かなと思っております。そんな中で、幸田工場は社員が700名ぐらいで、敷地面積は17万平米、そのうち約半分、40%が「ソニーの森」ということで、社員自ら、森の維持活動をやっている、ソニーの中でも結構珍しい、大々的に（環境活動を）やっている工場になります。この辺の話を、後ほどしていきたいと思っています。

では、幸田サイトは何をやっているところなのかですが、我々幸田工場では、高級なデジタルカメラあるいは交換レンズ、こういうものをお客様に届けるものづくりを営んでおります。

次に、ソニー全社で取り組んでいる環境計画というのがありますので、これを簡単に紹介

いたします。先ほどアイシンさんもありましたね。2050年度までに環境負荷ゼロという大きな目標を掲げております。具体的にはこの4つでございます。まず、製品でCO₂排出ゼロ。それから、採掘資源の使用ゼロと再資源化の最大化を実行するというところ。それから、我々の生産の営みの中では、化学物質を結構使いますので、そういうものに対しての削減、あるいは代替、こういうところに取り組んでいます。

我々、森を持っている関係もございまして、社員を含めて、(生物多様性の保全などの)環境活動、これは会社の中だけではなくて、地域、あるいは県の皆様と色々な活動をやっています。

これはソニー製品のライフサイクルでどういう活動をしているのかというところ、環境の話題に入る前にこちらを紹介いたしますが、ソニーのビデオカメラ、小さく軽くというのをやっていますが、これで省資源化を図っていこう、あるいはパッケージも小型化していこう、再生プラスチックをどんどん使っていこうという活動。

実は、名古屋市にグリーンサイクルという会社がございます。こちらは、ソニー製品だけではなくて、家電メーカーさんと一緒になって、リサイクル事業を営んでいる会社で、ソニーが引っ張っているというところで、ここで紹介しておきます。廃家電、廃PCのリサイクルの事業をやっている会社が、名古屋にございますという紹介です。

幸田サイトの緑化活動については、幸田サイトは歴史的にはもう45年経ちますので、創業者の思いで、緑豊かな理想工場ということで、この45年、社員が活動をしています。

活動の中身を幾つか紹介します。1つ目です。フクロウ。ここ8~10年ほど、トヨタさんと一緒になって、トヨタさんは「トヨタの森」にムササビがいるんですけど、我々、豊かな森とは何だろう、と考えたときに、フクロウ、こういうものを呼ぼうということで活動をしてまいりました。ようやく昨年度フクロウが来て、豊かな森というところの1つのバッジができたのかなと思っています。

それから、食事の話です。我々、森を持っていますので、3年サイクルでいわゆるドングリ、在来種であるコナラとかアベマキ、そういうものを1年目に芽を出させて、2年目、地域の住民の方に配って1年間育てていただいて、3年目に我々の土地、あるいは西三河のところに植樹をしていくという大きな活動につなげております。こんな活動も会社で取り組んでおります。

それから、先ほども紹介がありましたね。我々、あいちサスティナ研究所の取組を、1期・2期ですか、やらせていただきました。学生さんたちと一緒に、環境活動を一緒に考

えて、会社あるいは地域に発信していくということで、非常に社員の意識も高まりますし、学生さん、若い力をしっかりもらって、企業はしっかりとやっていこうという意識が高まった、とてもいい活動だったかなと思っています。提案いただいた内容をしっかり具現化してやってまいりました。

というところで、我々、ソニーらしい商品というのはいいんですけども、やはり環境も忘れずに共生して、持続可能な社会の実現に貢献していきますというところで終わりにいたします。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございました。

続きまして、桂川さん、よろしくお願いいたします。

【桂川】 ご紹介にあずかりました、金城学院大学国際情報学部国際情報学科4年生の桂川優奈と申します。よろしくお願いいたします。

私が環境に関わるきっかけとなったのは、幼い頃お母さんと一緒に山に植物を見に行ったりですとか、木の実を採りに行ったり、虫を捕まえに行ったりという経験が、今の環境の活動につながっていていると思っています。

さらに、私がちょうど小学校に上がりまして3～4年生になる頃に、CO₂という言葉が学校の中で聞かれるようになり、給食の時間の音楽でCO₂の歌などが流れていたのをよく覚えています。そのタイミングで、(啓発)ポスターを作るとか、水の節約、節電を行っていかうというのが、学校内でも大きく言われていた、そんな時期だったかなと思います。

そして、中学校に上がりまして、学校で緑のカーテンを行ってましたので、それに関わりながら金城学院大学の里山を訪問したというのが、私が大学内でKSCという学内の里山保全の活動に関わるきっかけとなりました。

大学で金城の里山の保全を行っている、その活動の内容についてなんですけれども、金城の中には竹林がありまして、その竹の伐採ですとか、それを使用した竹炭、炭の製作などを行いながら、子どもたちに里山を案内したり、里山で採れた木の実や枝を使ってリースを作ったりという活動を行っています。子どもたちに里山の現状を目で見てもらって体験してもらって、実際に楽しんでもらうという活動を行っています。

その活動を行っている中で、愛知県が主催をしております「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」の1期生として参加をさせていただきました。その際にご一緒させていただいたのがアイシン精機さんだったんですけども、その際にアイシン精機さんが行っている出前授業のお手伝いをさせていただきまして、子どもたちに、ただ山で遊ぶことによって知っても

らうだけではなくて、専門の講師の方をお招きして、現状を知ってもら、映像で見てもら、また、ゲームを通して自分も体感をしてもらうというような出前授業をお手伝いさせていただきました。私が小学校の頃よりも出前授業の回数というのはとても増えているように感じまして、普段関わっている活動の中でも出前授業の話ですとか講師の方の話を聞く機会がとても多いです。

そのように、出前授業が多く行われてはいるんですけども、ただ、やはり現場を見ることの大切さであったりですとか、現場を楽しむだけではなくて、その中で、現場はこうだけど、他の世界ではどうなっているか、他の国ではどうなっているか、今ここで起きていることが違う国だとどうなっているのか、というようなことも並行して知っていかないと、子どもたちにとっての知見が広がらないなということを感じたりもします。

今まで学内で行っていた活動はほとんどイベント的なもので、それに参加したいと思ったお子様であったりお母様であったり、環境に関心のある方しか参加していないというのが正直な現状です。ですので、出前授業のように環境にもともと興味がある子でも興味がない子でも、一律して授業が受けられる、同じ情報を得ることができる機会をもっと増やす、もしくはもっと質を上げるというようなことが必要ななと思っております。

私が、今、NPO法人のEPOの方でもお手伝いをしているんですけども、その際に伺ったお話といたしましては、出前授業のマッチングに対して学校内でできることに限りがあるという話をよく伺います。ですので、学校内だけに留めずに、フィールドワークの機会であったりですとか、教材であったりですとかといった機会、環境についてより情報を平等に子どもたちに広めていく機会というのが、これからも愛知県にとって必要ではないかなと思っております。

以上になります。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。また、「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」、今、やっておりますので、引き続きよろしくお願ひしたいと思ひます。

それでは、続きまして、後藤先生、よろしくお願ひします。

【後藤】 よろしくお願ひします。東洋大学情報連携学部の後藤でございます。3月まで豊橋技術科学大学におりまして、現在も豊橋技術科学大学の客員教授をしております。私自身は、技術を導入したときにどれぐらいCO₂が増えるのか減るのかとか、廃棄物が減るのか増えるのかとか、そういった計算を長年研究してまいりました。

地球温暖化対策の問題ということで、スライドを作らせていただきました。愛知県の温室

効果ガスの削減なんですけど、2013年度の約8,000万トンを、目標として、2020年度で約6,580万トン、2050年頃に約2,460万トンに削減するというので、非常に大変な目標ということになります。

温暖化の問題点の大きなものとしては、全員が加害者であると同時に全員が被害者であるということなので、当事者意識が極めて希薄ということなんです。

県の方で長年いろんな世論調査をしまして、CO₂に関しても幾つかやっておりましたので、それを抜き出してみたんですが、ちょっと古いんですけど、平成21年度では、地球温暖化について関心があるかという問いに対して、89%は関心があるということで、非常に関心は高いということはわかったんですけど、ただ、平成28年度のエコアクション（環境配慮行動）の取組状況についての調査では、毎日の暮らしの中でどのようなエコアクションをしているか、例えば冷暖房を控えるなどの節電をするといった行動を起こしているのは50%以下であるということで、関心はあるんだけど、行動を起こしていないと、こういったところが非常に問題かなということがございます。

市民の環境行動への動機づけといたしまして、環境問題だけで行動を決めるというのは非常に少ないかなと思っております。先ほど、宮澤さんも言っていましたけど、金銭的なものであるとか、そういったものが行動に大きく直結しているということでもあります。あとは費用とか、便益ですね。便益としては、金銭的な便益もちろんですが、楽しいか楽しくないか。知事も最初に魚釣りのことをおっしゃいましたけれど、これも魚釣りが楽しいから参加するということでもありますね。さらに、最近は安心安全というものも着目されておりますので、環境問題だけで行動するというよりは、費用、便益、安心安全、こういったものが行動を決めているということでもあります。ですから、費用だけ取り出してみますと、やはり温暖化対策と経済的な利益、これを両立させないといけないということを思っております。

やはり、温暖化対策が金銭的な利益であるということを紹介しなければいけない、ということかなと思っております。もちろん、県のホームページにも節電すると幾ら節約になるかということが載ってはおりますけど、それだけではなくて、もっとあらゆる行動において金銭的な利益に直結すると。むしろ、金銭的な利益に直結しないものは、温暖化対策からは除いてしまってもいいのではないかと、極端に言えばそうかなと思っております。

また、大企業の方、アイシンさんとかソニーさんの紹介がありましたけれど、温暖化対策の方は非常に努力されていると、自ら進んでやられているということなんですけど、中小企業の方がなかなか難しいという面もありますので、中小企業の方々へ省エネの技術を導入すれ

ば金銭的にも有利になるといったことを紹介するということが大事ななと思っております。そこで、県のホームページを調べていましたら、「あいち省エネ相談事業」というのを既に実施しております、これはぜひとも続けていただければなと思っております。

あと、数値的なことをちょっと詳しく申し上げますと、行動を起こして温暖化ガスを削減して、どれぐらいの費用対効果があるかという、定量的な情報というのは非常に大事になってくるわけですね。それと同時に、これを計算するのは非常に難しいんです。自分の行動が本当にCO₂を削減するのかどうか、あるいは金銭的に有利かどうかということの数値的に表すのは、複雑な計算が必要になってきます。とはいっても、やはりそれを数値として情報発信して、人々の行動の基準にしなければいけないということでありますので、できればそういう計算ができる職員の方がいると、県の行政の政策も進めやすいのかなと。さらには、県内の大学にそういったCO₂の対策の数値情報を計算する専門の寄付講座などというのでできるといいかなと思っております。

私の話は以上でございます。ありがとうございました。

【知事】 ありがとうございます。また後ほどよろしく願いをいたします。

それでは、宮木さん、よろしく願いいたします。

【宮木】 中部電力の宮木と申します。どうぞよろしく願いいたします。今日は私個人の業務ですとか経験を通しまして、意見を述べさせていただきたいと思っております。

現在、業務の中で特に力を入れておりますのが、こちらのスライドの環境エネルギー塾になります。環境問題とエネルギー問題を切り離して考えることはできません。また、エネルギー問題は環境だけではなく、経済、安全、国際関係、技術が絡む複雑な問題でもあります。この環境エネルギー塾を通じて、様々な電力現場を体感していただくとともに、資源が少ない我が国が抱えるエネルギー問題を踏まえ、地球温暖化の観点からも長期的な視点に立って、自分の意見が持てる次世代層を増やしたいと考えております。本日（意見交換者として出席されている）桂川さんや宮澤さんのような、将来を担う若い世代が主役となって、エネルギーの議論が深まるよう、力を注いでおります。

また、名古屋商工会議所の環境分野における女性活躍推進ワーキング、通称「名商エコ女」ワーキングでは、国連が掲げる持続可能な開発目標SDGsをワーキングメンバー自らも学びながら、広く発信する活動をしております。スライドにありますのは、私が今年の5月末にプライベートでザンビアという国に行った時のもので、電気や水道のない村で、貧困と格差、衛生や教育、そして生物多様性の損失など、リアルアフリカでの様々な問題を肌で感じ

まして、SDGsの重要性を体験する、貴重な体験をしてまいりました。ちょうど今週末のエコ女の活動では、このザンビアの体験を通じてのSDGsのミニ講義を行う予定をしています。

次に、環境パートナーシップクラブ、通称EPOCについてですが、中部地域の産業界が中心となって立ち上げた組織でして、業種、業態の枠を越え、持続可能な経済社会の実現を目指しております。産官学が連携し、愛知環境賞などの共同事業も含め、様々な活動に取り組んでおります。ちょうど現在、当社（中部電力）がEPOCの会長会社ということもあり、中部地域の優れた環境先進技術に触れる機会も多く、恵まれており、連携の強みを痛感しております。また、このような組織は関東・関西圏にはなく、愛知県を中心とした中部地域の大きな強みであると考えます。

こうした私の経験を踏まえまして、意見を2点述べさせていただきます。1点目は、SDGsを国内外に発信する国際イベントの誘致です。愛知県は愛知万博やCOP10、ESDユネスコ世界会議など、様々な国際イベントを開催した実績があります。そして、これら全てのイベントにもつながるSDGsをこの愛知から国内外に発信していくことは、とても意義があることだと思います。また、SDGsの目標には、気候変動、温暖化への取組もありますので、県民の意識を高めることにもつながると思います。

さらに、この中で次世代層が活躍する場を提供し、未来のイノベーションを起こす原動力にできたらと思います。2019年秋に完成する愛知県国際展示場という場もありますし、中部地域の強みであるパートナーシップを発揮して、ぜひ知事にSDGsの国際イベントの誘致の実現を目指していただきたいと考えております。

2点目は「クールチョイス運動」を国、県が一体となって展開するということです。現在、環境省が国民運動として展開をしている「クールチョイス運動」は、県の取組としてはあまり発信が少ないように感じています。これは、愛知県としては「あいちエコチャレンジ21」という運動を展開しているからだと思いますが、同じ趣旨であることが多いので統一感がないため、ちょっと残念に感じております。愛知県としての独自性も理解はできますが、統一感を持った方が発信力も高まり、県民の理解も深まると考えます。「クールチョイス運動」の中で、愛知県としての独自の取組を発信していくといいのではないかと思います。例えば、県民全体でどれだけの資源が削減できるのかを数値化した上で、コンビニでの箸や割り箸の不要運動を展開したり、飲食店を巻き込んで食べ残しゼロの宴会を割引するといった食品ロス低減運動などはいかがでしょうか。

以上が、私からの意見です。ありがとうございました。

【知事】 それでは、また後ほどよろしくお願いいたします。

それでは、一当たりご意見をいただきましたので、これを踏まえて、また、様々にご意見をいただきたいと思います。

早川さんから、先ほどの補足の発言でも何でも結構ですので、気づいたこと、また、皆さんの意見を聞いて思ったことなど、ご発言いただければと思います。

【早川】 私は教育の重要性ということでお話をさせていただきまして、やはり教育関係のお話には非常に共鳴する部分がございます、例えば、桂川さんがおっしゃった、出前授業の回数がだんだん増えているので、それはすごくいいことだと思うというお話があったんですが、実は、私が10年前に小学校への出前授業を始めたときというのは、某企業さんが資金的な援助をしてくださって、全国で800校という小学校に行っていましたので、私も年に10回ぐらいは東海三県の小学校に行っていたんですね。ところが、景気が後退したときにスポンサーさんが降りてしまって、なかなか継続ができないという。ただ、やはり、やらなければいけないことですので、NPOとして独自に運営して、今も年間数回は出前授業を行っているという感じです。ですので、先ほど中野さんも、一企業がすることは限りがあるというふうにおっしゃっていたんですけれども、いろんなNPOであるとか企業とか、連携して環境に関する啓発活動などを行っていくことが非常に大事だなと思いました。

あと、1つ宮澤さんにお聞きしたいなと思ったことは、子どものときに小学校の環境教育で宮澤さんご自身が環境に関する興味を持ったというお話をなさったので、私も小学校に向いて出前授業を行うときに、どんなことを言ったら子どもたちを将来の宮澤さんや桂川さんのような人材にすることができるのか、というヒントをもらいたいなと思ったので、例えば、宮澤さん、どんな言葉が響いたか、覚えていらっしゃる範囲で構いませんので、教えていただけたらと思ひまして。

【宮澤】 私は総合学習の授業で、ちょうどその小学校に熱心に地球環境問題などに取り組んでいる先生がいて、近所の農業用水のところに行ってカエルなどを捕ったり、生物を捕って、これは外来種だね、みたいなことを実際に見ながらやったり等ということが最初にあって、その活動自体が楽しかったというのがまず最初で、多分小学校のときはそんなに危機感みたいなものは持っていなかったのかなと思います。

ちょうど、私が5年生のときに愛・地球博があったので、それで興味が継続されて、日常の当たり前なところに環境の話題があるというような生活を送ってきたので、私自身は危機

感をあおられてというよりは、こういうことも考えていくのが当たり前かな、みたいな感じで過ごしてきたという感じです。

【早川】 ありがとうございます。

やはり継続的に子どもの頃からそういう場があって、さらに、今、愛知県でもいろんな世代ごとに、社会人には環境塾があったり、大学生の皆さんにはサスティナ研究所があったりということなので、これをやはりずっと永続的に続けていくことが大事だなと思います。

【知事】 そうですね。先程言われた、昔と比べてと言っても、子どもに言ってもわからないですね。

【早川】 そうなんです。

【知事】 昔がないですね。

【早川】 そうです。

【知事】 確かに。

【早川】 でも、これをやはりちゃんと、昔といってもほんの30～40年前ぐらいの感じじゃないですか、その隔たりとしては。特に、一気に環境が変化している、経済状況も変化しているというのを大人の世代がきちっとお話をしていけないのかなと思います。

【知事】 昔と比較して、やはりこの10年～20年ぐらいは、天気が変わってきているような気が個人的にはしますね。別にデータがあるわけじゃありませんけれど。

【早川】 はい。特に90年代以降ですね。95年以降ぐらい。

【知事】 だから、この20年ぐらいですね、やはり。

【早川】 そうです。

【知事】 何となしに、雨の降り方が昔と比べると激しいなというか、そんな感じがしますね、やはり。

【早川】 そうですね。

【知事】 夏は暑いしね、昔よりも。

【早川】 そうです。

【知事】 やはり継続してやっていくということが大事だというようなこと、おっしゃるとおりだと思います。

【早川】 お願いいたします。

【知事】 ありがとうございます。

それでは廣瀬さん、先ほど牧野ヶ池緑地公園での活動をご紹介いただきましたが、私は毎

年顔を出させていただいておりますし、高校の屋上に竹を並べるのも、また毎年顔を出させていただいておりますけど、本当に放置竹林の藪だったものが大分きれいになって、大変ありがたい限りだと思っておりますが、また先ほどの発言に続いての追加の発言があれば、補足でどうぞ。

【廣瀬】 今、竹林の伐採整備をしていて、最終的に、竹林を全国的にきれいにするには、竹のバイオマス発電に持っていきたいということで、一昨年から愛知県の環境部と歩調を合わせていろいろ作業をしています。大体案はできまして、この10月ぐらいの目処で農林水産省の東海農政局へ書類を出すつもりでおります。これも、農林水産省のバイオマス産業都市構想という、行政と一緒にやりなさいという指導で、今、愛知県と歩調を合わせています。

それから、もう1つは、先ほども話をしましたように、竹の粉は非常に発酵するんですよ。御存知のように、パンダは竹で生きておるわけですよ。だから、竹には非常に有能な成分があるんです。その成分が発酵しますと、今の家庭の生ごみとか魚のあらとかを堆肥にして地球に還元すると。そんなようなことを、これは名古屋市のバイオマスタウン構想で、これも行政と一緒にやりなさいという農林水産省の指導で、名古屋市と今、一緒にやっています。これも10月ぐらいを目処に名古屋市から、これからどうするか、僕らに方針を伝えるという約束になっていますので、また行政の皆さんに応援をお願いしたいと思っております。

それから、この席を借りまして知事をお願いがあるんですけど、私は愛知県の支援であいち森と緑づくり環境活動・学習推進事業を2つやっているんですけど、牧野ヶ池の竹林の中に県民が通れるような散策路を作ろうということで2年前からやっているんです。これも私達が竹林伐採をやる合間の時間とお金の中でやっているんですけど、あと少しですけど、来年は予算を多少見ていただきたいと。

それから、高校屋上の竹敷きは、5年経ったら撤去しようと思っております。どうして5年かというと、竹の竿には、最初の青いときは空気層があるんですけど、2～3年経つと、竹にひびが入ってきまして、空気層が外気と触れて断熱効果も薄れるだろうと。ですから、5年で撤去しようと思っております。それで、去年は惟信高校の竹敷きを撤去したんですけど、今、環境部の方は（敷いた竹の）撤去まで考えが及んでいないと思うんです。だから、撤去する予算をこの場所を借りてお願いしたいと思っておりますので、よろしく申し上げます。

【知事】 その点は、またぜひ検討させていただければと思っております。

先ほどお話いただいたバイオマス発電の（材料）、あれは竹の粉ですか。粉にして燃やすということですか。

【廣瀬】 いえ、バイオマス発電は竹を寸切りにしまして、そのまま放り込みます。

【知事】 そのまま燃やすわけですか。

【廣瀬】 ええ。

【知事】 わかりました。

【廣瀬】 バイオマス堆肥の方は竹を粉にしてプラントに混ぜ入れます。

【知事】 生ごみと混ぜて、発酵させるわけですね。

【廣瀬】 はい。

【知事】 わかりました。またよろしく願いいたします。

それでは、中野さん、いかがでしょうか。

【中野】 私は後藤先生のお話の中で、環境に対しては当事者意識がみんな希薄だということ、まさにそのとおりだと思います。我々も従業員の環境教育に力を入れておるわけですが、ちなみに私の所属は安全衛生環境部ということで、外向けの環境という分野も見ていますけれども、安全衛生、つまりは従業員が職場内で怪我をしないとか、そういった部分も両方見ておるわけですが、従業員の安全の方は、比較的人ごとでなく、動いているものの中に手を入れれば怪我をするよね、と自分ごととして捉えやすいんですけども、環境については、例えば、廃棄物はその場からなくなってしまうととりあえずすっきりする、排水もシンクに流してしまえば、とりあえず目の前から消えてしまいます。それで人ごとでずっと済めばいいんですけど、当然済まない。では、どうしようという中で、我々が採っている1つの手法としては、過去に失敗してしまったような事例がいろいろあるものですから、そういったところを提示することで、危機感を持ってもらうと。めったやたらに危機感を持ってもらうことが正しいことではないと思うんですけども、やはり正しい危機感をしっかり持ってもらうということが大事なのではないかなと感じまして、今、対応しております。それから、行動によってCO₂が減るといふ、その数値化というところもやはり大事だなと思ひまして、なかなか数値化は難しいと思うんですけども、そうやって見える化していくことで達成感にもつながっていくのかな、と勉強させていただきました。ありがとうございます。

【知事】 ありがとうございます。危機感をみんなが持つことは、確かになかなか難しいと言えば難しいかもしれませんね。

先ほどの、昔と比べてというお話ですが、我々が子どもの頃は結構いろいろなところ、川でも道路でも、ごみとか結構落ちていたんですけど、僕は国会議員のときから定期的に地元

の清掃活動に参加していますけど、今、本当にごみは落ちていませんよね。こんな袋なんて、いっぱいになりませんか、絶対に。みんなで定期的にごみを拾っているから、ごみを探す方が大変だなというようなくらいの感じですね。みんな、よくやってくださっているという感じがします。ですから、そういうことからすると、今の子どもたちって、別に今のままでいいのでは、という感じがあるのかもしれないね。

【早川】 　ただ、地球温暖化に関して当事者意識という観点で言うと、今、これだけ気候の変動というか、気象災害なんかがあるので、チャンスといえばチャンスではないかと。

【知事】 　なるほど。それはそうかもしれませんね。

【早川】 　啓発と防災意識、先ほど緩和策と適応策の2つということで、両方の軸で、今こういうことが起こっている、その原因の1つが地球温暖化だよということで、つなげていくといいんじゃないかなと思います。

【知事】 　本当ですね。地球温暖化対策を気候変動等と結びつけてということですね。

【早川】 　はい。喫緊になっているので。

【知事】 　見た目でいくと、本当にごみも少なくなったし、例えば、自動車で言えばトラックの排ガスは黒いものだということがありました。今は規制されていますから、見た目でもわかりませんよね。それはいいことですね。

おっしゃるとおり、危機感を持って、当事者意識を持って我々もしっかり、(子どもたちに)伝えていかなければいけないということなんだろうと思います。ありがとうございます。

それでは、また、宮澤さん、よろしく願いいたします。

【宮澤】 　私も後藤先生のお話にすごく共感というか、そうだなと思ってお聞きしていましたが、先ほど、(早川さんのご質問に) お答えする中でも言ったように、私は、気づいたら環境のことを考える機会が継続的にあったので、割りと興味は持って考えるんですが、実際に行動に結びつけているかというと・・・。普段の自分個人のレベルではそうでないこともたくさんあるし、ボランティアなどでやっても、実際に効果があるんだろうか、みたいなところはいつも考えていて、今回の発表を考えていて思ったことは、大学生の行動として、どこかにみんなで遊びに行こうとなったときのことを想定して今日はお話しさせていただきませけれども、では、どういう方法で行くのか、車か公共交通機関かというのを決めるときに、ガソリン代を何人以上で割れば交通費よりも安いから車の方がいいんじゃないか、とか、帰りの夜ご飯の後はお酒を飲みたいから電車で行きましょうとか、そういうふうを決めていくので、費用とか便益というのがやはりメインになってしまうなと思いました。

でも、結果的に、何人かで乗り合わせていけば、車なんだけど意外と地球環境に悪くはないんじゃないかなとか、そういうようなこととかも考えたときに、やはり、どういう計算をしたらそういうのがわかるのかとかということ学ぶ機会は今までなかったもので、そういうことを知って、自分の生活の中でそういう視点で考えていけたら、当事者意識という面でも、自分がやったことの有効性みたいな事を感じながらできていいのかなと、お話を聞いて考えていました。

以上です。

【知事】 ありがとうございます。

それでは、川島さん、よろしく申し上げます。

【川島】 早川さんの話は、やはりみんなの意識がどうなんだろう、という問題提起だったと思います。まず、我々の会社の中で言っても、本当にまだまだで、みんながボランティア精神をしっかりとって、環境活動を継続的に行うというのには、まだまだ意識が低いというのは、工場長として見ても（思います）。もっともっと盛り上げる活動をしようとしています。

会社の中から少し出ると、先ほどあった廣瀬さんの話ですか、竹の間伐をやっていると。うちの森にも実は竹がたくさんあるんですね。この竹の保全活動で、間伐しなきゃいけないということもあるんですが、例えば、少しイベント的に考えると、うちの会社では、門松を年の暮れになると社員の手で作ろうとか、そんなことをやって、森に対しての意識をみんなが高めようとか、そういうことをやって、先ほど紹介したんですけど、在来種をもっとうちの会社から外に広げよう。

もっと言うと、愛知県で言えば、西三河とか東三河、こういうところでは、実は私は、ゴルフをやるのであちこち行くんですけども、まだまだ間伐ができていない部分があったりして、ゴルフ場に行く途中にいろんなキャンプ場があったりゴルフ場があったり、あるいは、どうなんでしょう、道の駅とかいろいろあるんですけども、そこを見ているだけでも、こっつもっと我々が手を出さなきゃいけないのかなと、道を走っているだけでも結構感じる場所があったりして、県として、または市としてなのか、そういう活動を通してでも意識を上げる活動というのが、直接的に（環境活動を）やる以外にも、もっと県民の意識を上げる活動というのはできたりするのかなということを思いました。

【知事】 ありがとうございます。県では、森と緑づくり税として、1人当たり県民税500円を年間でいただいて、合計で20数億円になるので、それで事業をやっていて、大分間伐は

できてきた。もちろん、森林組合とかで実際に作業をやるには人手がいるので、その範囲の中でというのがありますが、見た感じ、大分結構進んできたかなという気はします。もちろんこれからですけどね、まだまだですが。また引き続き、さらに継続して進めていければと思っておりますので、また、そういった点もよろしくお願いたします。

それでは、続きまして、桂川さん、よろしくお願いたします。

【桂川】 皆様のお話の中で、やはり環境学習というのが1つの大きなテーマかなと思っています。先ほど中野さんがおっしゃったように、学ぶ機会、知る機会というのの大切さというのを聞いている中で、宮澤さんが授業の中でまず知って、その後、愛・地球博というイベントでまたさらに深めていってということをおっしゃっていたように、授業でみんなが知る機会があつて、さらにイベントでも知る機会があつて、中にはイベントに行く子、行かない子がいるかもしれないけれど、授業や遠足であれば、クラスの全員で知ることができる、見に行くことができる、こういう機会がとても大事かなと思っています。

また、その中で、当事者意識の話も議論として上がっていましたけれど、やはり自分の目を見た方が信じやすい、あるいは実感しやすいので、目に見えないものであつたりですか、遠くの世界のことは意識しにくいというのはもちろんあることなので、それをどうやって自分が知るか、もしくは、少しでも体験できる機会をこれからも増やすことであつたりとか、多くの団体であつたり企業さんが関わられるような機会をどんどん増やしていくのが必要かなと感じながら、皆さんの話を聞いていました。

【知事】 桂川さん自身は、「かがやけ☆あいちサスティナ研究所」という、学生さんと企業さんとがコラボして、様々に環境問題とか、いろいろな商品を作ったり提案をしたりという活動に参加していただいて、2年前は学生さんとして参加していただきまして、今はこの研究所のファシリテーターの補佐としてサポートしていただいておりますよね。何か違いは感じますか。2年前、実際に研究生として参加したのと、今の役回りと。

【桂川】 やはりファシリテーターという立場に立ったことによって、学生に対してどう伝えていけばいいのか、また、企業さんの立場から考えたらこういうことをもっと提案しなきゃいけないというような、両方の視点を持った上で学生であつたり企業様とお話しするというような視点に立てたというのが大きな違いかなと思っています。

【知事】 なるほど。また、引き続き活動に取り組んでいただければと思います。

それでは、後藤先生、よろしくお願いたします。

【後藤】 先ほど、中野さん、川島さんから、社員の教育という話も出ましたが、もし

かしたら、県庁もそういったことが必要じゃないかなと思ってまして。温暖化対策というのは、やはり全ての人たちが関わるべきだと。地球温暖化対策室という所属が県にありますけど、全環境部の取組であると。例えば、資源循環推進課で補助申請するときに、CO₂の削減量を記載するとか、そういったことも関わってきます。また、環境部だけではなくて、産業労働部とか農林水産部、建設部、県民生活部、教育委員会など、先ほどから教育という話が非常に出ていますけど、やはりそういった横断的な取組が必要であると。例えば、豊川浄化センターの施設更新において、CO₂削減量というのを非常に重要なファクターとして評価しておりましたので、そういった取組は大事なことだと思いますし、素晴らしいことだと思います。全ての部署においてCO₂に対する意識を持ってほしいなと思っています。

おそらく、現在進行でいろいろなところでやられていると思うんですが、取組を一覧できるようなマップがあるといいかなとは思っております。

もう1つなんですが、電力消費、特に電力を多く使う企業さんにとっては、電力消費の、温室効果ガス排出係数というのは非常に大事なポイントになります。隣に中電の方がいますが、まったく関係ありません。打ち合わせもしていませんし、私は独自で言うんですが、浜岡原発の再稼働というのは、再稼働についてはいろいろ議論がありますので、それを話す場ではありませんけど、CO₂削減に関しましては非常に有効であるということがあります。

あとは技術についてですが、再生可能エネルギー、先ほど中野さんの方でもいろいろとおっしゃっていただきましたけど、非常に大事であります。いろいろまだ問題はありますが、いろんな研究者が研究しておりますので、これから大いに期待しているということになります。

新エネルギーとして、廃棄物の焼却熱の高度利用というのは、次の技術かなと思っております。廃棄物の発電というのはFIT（固定価格買取制度）の関係で非常に流行っていますが、熱効率から考えれば、発電するより熱を直接利用した方が非常に効率がよいですね。そうすると、CO₂の削減にも貢献する。ただ、廃熱の需要が課題ですね。廃熱を使う側がないと、そういったシステムは成り立たないわけなんです。けれど、産業利用であれば廃熱の利用も非常に需要が多いということになります。

ただ、廃棄物の焼却熱を使おうとした場合に、焼却炉というのが必要になってきますので、その焼却炉の建設の立地もまた違う問題で、なかなか自由に立地できないという問題があります。

あと、ついでに言いますと、IoTとかAIというのは、今、非常に盛んになっておりま

す。環境分野に関しては、これからどんどん広まってくると思います。ですので、CO₂問題に関しましても、IoT、AIなんていうのは非常に大きく貢献してくると。これはまさに産業労働部の分野かと思いますが、そういった意味でも、県の中でも横断的な分野かなと思っています。

例えば、インターネットにつながった家電がどんどん家庭に普及してくると思いますので、そういった家電が普及すると、エアコンが自動でオン・オフして、CO₂を削減してくれるということもあり得るわけですね。そうなってくると、CO₂の複雑な計算をしなくても、我々は普通に生活していて、もう勝手にCO₂を削減してしまうといった生活も、これからあり得るかなと思っています。以上でございます。

【知事】 ありがとうございます。県庁全部局で取り組むというのは、そのとおりだと思いますので、またしっかり取り組んでいきたいと思っています。よろしく願いいたします。

それでは、宮木さん、よろしくお願いします。

【宮木】 早川さんの方で、NPOと継続的に活動していくために、やはり企業との連携がすごく大事というお話がありましたけれども、先ほどお話した環境エネルギー塾というのは、名古屋環境大学の企業枠ということで実施させていただいているんですが、その中で、いろんなNPOの団体さんとも知り合う機会がございまして、非常に真摯に熱心に活動されている皆さんがたくさんいらっしゃるの、例えば県としてはそういった団体の活動を紹介するとか、活動内容をできるだけ発信させていただいて。企業の方も、なかなかNPOとの接点がないと支援の仕方が難しい部分があったりしますので、本当に真摯に、熱心に活動されている団体をきちんと評価して発信していただければ、ボランティアですとかいろんな活動もしやすいというか、わかりやすく参加できるのかなと思います。

そして、今日、宮澤さんや桂川さんのように若い人がこうやって環境に熱心に取り組んでいるのには、やはり小さい頃の経験というのが非常に大事だなというのを伺って感じましたので、そういった部分でも県として、できるだけ教室だけではなくて、外に出る機会がカリキュラムとして設けられるよう推奨をしていただくと、非常にいいのかなと思いました。

あと、いろんな県民意識というか一般の取組の中で、企業の省エネの取組というのは、この地域は非常に進んでいると思います。が、一般の家庭、一般市民においては、世の中は非常に便利になり、電化製品も増えて、電気の使用量も昔に比べて増えておりますので、省エネの取組を、いかに楽をしてというか、無理なく取り入れられるかということがポイントで

はないのかなと。それをわかりやすく伝えていくのが「あいちエコチャレンジ21」であるとか、環境省さんも今、力を入れて、フェイスブックですとかをやっていますので、そういったものを上手に県として活用して行って、県民の人に浸透するような発信をしていただけたらよいかなと思います。

【知事】 ありがとうございます。今言われた、環境活動をしている様々な団体を評価して発信すると、これは大変大事なことでありますから、環境パートナーシップクラブ（E P O C）の表彰などの取組も、その一環と言っていいのではないかなと。あれは企業さん単位での技術的なものが多いんですが、結構輪が広がっているので……。

【宮木】 そうですね。

【知事】 毎年、企業さんの取組とか熱意が上がって、レベルが高くなっているのです。

【宮木】 そうですね。ですから、中部ならではの、独自性というか、他にはないパートナーシップの強みかなと思います。

【知事】 そうですね。いろんな場面で環境活動に取り組んでいる方々を、積極的にアピールしていくというのは我々の役目であると思っていますので、また引き続きしっかりやっていきたいと思っています。ありがとうございました。

他にいかがでございましょうか。またさらに言い足りないということがあれば言っていただければかなと思いますけれども、いかがでしょうか。

どうぞ、後藤先生。

【後藤】 環境教育について、皆さんいろいろと自分の体験をもとに語られていらっしゃるんですが、やはり楽しいというのは一番大きなポイントかなと思っています。小学校のときに受けた野外の活動が楽しい、NPOに参加して汗を流すのが楽しいという、そういった楽しい体験が意識せずにCO₂の削減につながるとか、そういった仕組みが必要かなと思っていますので、県の1つの政策として、楽しい政策をどんどんしていただければかなと思います。

【知事】 ありがとうございました。

冒頭で、私が申し上げた昨日の釣り大会もそうなんですが、楽しい活動だから続いていくということですね。やはり自分たちが楽しんで釣り大会をやるんだったら、その前に、釣らせてもらうところだけ掃除するぞと言って、別に誰かに言われているわけではなくて、自分たちで勝手にやっているんですけれども、そういう取組は続いていくのかなという感じはしますね。

また、先ほど川島さんからもお話がありましたが、三河の山間部のことなんですが、私は最近、行くたびに思うのは、これは環境の話とも絡むんだろうとも思うんですけど、山間地域の田んぼや畑、全部柵で囲われているでしょう？

【川島】 そうですね。

【知事】 あれ、異様ですよ。

【川島】 すごいです。

【知事】 私が子どもの頃、こんなものはなかった。この10年ですよ。イノシシやシカが増えて……。

【川島】 サルとかシカがたくさんいるんです。

【知事】 サルもそうですね。だから、田んぼも畑もみんな食べてしまいますよね。造林で新しい杉とかヒノキの苗を植えたらみんな食べてしまうわけでしょう。これは愛知県だけじゃなくて。岐阜県とか長野県などは、イノシシやシカの数も愛知県の比じゃありませんから。だから、田んぼや畑を柵で囲って、結局人間がおりの中に入って耕作しているという感じだということですね。雰囲気的には。

【川島】 あれはやはり、どんどん動物たちが山から下に降りてきてしまうんでしょうか。

【知事】 僕が設楽の町長に聞いた話では、設楽といっても、田口とか北設楽郡の一番奥のところですけども、自分たちが子どもの頃は（イノシシやシカは）こんなにいなかった、増えたと。やはりこの10年、20年ぐらいで増えて。昔はイノシシの被害などなかったと言うんです。だから、これは一体どうしてなんだろうと。わからないんです、私も。

だから、捕まえるために、猟友会のハンターの資格を持った人をお願いしたりもしますが、わなで捕るのが一番早い。

だけれども、殺して山に埋めちゃうだけでは申し訳ないということもあって、ジビエ料理として出しています。せつかくですから、命を頂戴して食べた方がいいということで、今、愛知県内に4か所になったかな。シカ、イノシシの解体処理施設を県が補助して作っています。一方で、シカ、イノシシの野生の肉って、そう売れませんしね。

【川島】 そうですね。

【知事】 売り先を考えなければいけないし、やることは結構あるんです。けれど、シカやイノシシがこんなに増えるというのはなぜか、何か理由がないと勝手に増えませんからね。

【川島】 そうですよ。

【知事】 やはり環境の変化が影響しているのかなという気がしますけども。これは全国

的な問題ではありますけどね。

【川島】 外来の動物の問題も結構あるらしいですけど。

【知事】 外来種の問題は、これだけグローバル化してくると、やむを得ないところはあるかもしれませんがね。最近で言うと、例のヒアリの問題もあります。ヒアリは水際の対策を今、一生懸命やっているところですけどね。

【川島】 いろんな食べる物が山の奥の方であればいいんですけど、どんどん枯れてきちゃって、イノシシやシカが下に降りてこざるを得ないとか。

【知事】 そういうことはあるでしょうね。それと、一旦里で人間がつくった農作物を食べると、当然栄養分があっっておいしいに決まっているから、味をしめてどんどん食べに来るというのと、両方ありますよね。

【川島】 そうですね。しかし、(柵に囲われた田んぼや畑は) 確かに異様な光景ですね。

【知事】 全ての田んぼ、畑ですよ。柵がないところがありません。なければそこだけ、すぐ被害に遭うから、みんな作りますよね。

そういう意味でも、環境がいろいろ変わってきたなということを、あれを見ると本当によく感じますけどね。

他にいかがでございましょうか。最後に一言、言っておきたいというのがあれば。よろしいですか。ありがとうございます。

それでは、今日は活発なご意見、意見交換をいただきましてありがとうございます。皆様からいただきました貴重なご意見、ご提言、お話はしっかりと受けとめさせていただいて、今後、県の取組を進めていく上で、ぜひ参考にさせていただければと思っております。県といたしましても、引き続き、環境の保全と産業経済の発展が両立する低炭素社会の構築に積極的に取り組んでいきたいと思っております。

最後に、自分の体験で言うと恐縮ですけど、下水処理施設も増えてきたので、川とか池とか湖、海もきれいになったなとも思いますし、ごみも大分減ってきたということも思いますし、やはり空気もきれいになったかなという感じがします。

私は、家が西三河の一番南の方、矢作川の一番河口の辺のちょうど油ヶ淵という池のすぐ南側で、碧南というところの生まれですけども、子どもの頃、普段は御嶽山は見えなかった。けれども、年末からお正月にトヨタ自動車の工場が休みになると、当時は一斉にみんな田舎に帰っていったので、工場が止まると、きれいに雪をかぶった御嶽山が見えたんです。けれど、今は冬になると、晴れていれば毎日、雪をかぶった御嶽山が見える。それだけでも違

うなど、全然変わったんだというのを実感いたします。といっても、(見えなかったのは)昭和40年代ですけどね。50年代ぐらいにはもう大分見えるようになってきたかなと思いますが、大分変わってきたし、皆さん、環境にしっかり取り組んでいただいているということが、本当によくわかります。

かけがえのない地球、そして日本、そしてふるさと愛知でありますから、引き続き、環境対策にはしっかり取り組んでいきたいと考えております。

日本一の産業県である愛知だからこそ、環境対策でもトップランナーでなければいけないと思いますし、この愛知モデルを日本国内というよりも、全世界に発信をしていければと思いますし、ぜひこういったモデルで中国も対策してほしいなど。毎年春にPM2.5の心配をしなくても良いように、そう願いたいと思います。

いずれにしましても、引き続き環境面についてご支援、ご協力をいただきますようお願いいたします。

今日は短い時間でありましたが大変有意義な会となりました。改めて厚く御礼を申し上げて、締めくくりとさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

— 了 —